

Title	考古学の世界における相関について
Sub Title	On the significance of correlation in an archaeological sample
Author	赤澤, 威(Akazawa, Takeru) 小宮, 孟(Komiya, Hajime)
Publisher	三田史学会
Publication year	1982
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.52, No.2 (1982. 9) ,p.49(213)- 59(223)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19820900-0049">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19820900-0049</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 考古学の世界における相関について

赤 澤 威  
小 宮 孟

マンチェスター大学博物館館長であったセイス(R. U. Sayce)氏が昭和八年に著わした“Primitive Art and Craft—An Introduction to the Study of Material Culture”は、約十年後、坪井良平氏によって、未開民族の文化—物質文化哲学論、という名で翻訳出版されています。

本書は、坪井氏が述べているように、さまざまな民族の物質文化を比較し文化の多様性とその中に認められる各種の規則性を簡明にかつ興味深く論述したものです。坪井氏は、当時わが国にこの種の問題を扱った著述が見当らなかったので翻訳を思いついたと述べていますが、本書は、その簡潔で明解な訳文とともに、いまだに十分な刺戟を期待できるすぐれた小著です。

本書の冒頭近く、民族学と考古学との関係を論じた部分があります。この問題は物質文化の研究を扱う書物で必ず一度は言及されますが、このセイス氏の文章程にわかり易くまた説得力のあるものはめったにみられません。すこし長くなりますがその一部を引用します。

“民俗学と考古学との関係は極めて緊密である。考古学は吾人の為に保存された過去の土俗学だと言ってもいいであろう。尤もそう言うためにはある制限を設けなければならぬ。考古学は一般に破壊される事の少い遺物、例えば石器、土器、金属器等を取扱ふ。処が環境によっては、木器、織物、籠細工及び皮革製品等の保存に適しない場合が屢々ある。そのために先史考古学者は、彼が研究しようと欲する文化を極めて不完全に代表する遺物の蒐集を以て満足せねばならぬ場合が尠くないのである。現代のズル人の住居址から、吾人は、巧妙に建築された若木や草で出来た小屋、種々の籠細工、酒を漉すのに用いる草の編物細工、藺の敷物、皮や繊維で出来た着物、草で綯ふた縄、臛の紐、木製の枕、木製の壺、皿及び匙、皮の楯、羽毛及び小玉で出来た装飾品、ノツブケリ及びアツセガイの棒、若干の土器、石臼、槍尖、斧及び多分鉄の小刀の刃及び耨等を発見するであろう。若し、之等の集積物が攪拌されずに残されたとしても、二千年後の考古学者が目撃し得るものは殆んど何も無いであろう。相当に複雑な文化として、

その製作者の需要を充していたところの物は、朽ち残った僅かの鉄製品と、二、三の土器片と石臼と若干の小玉によって代表されるに過ぎないであろう。今日の考古学者は、斯の如き貧弱なる材料を以て、科学の操作を借り、想像の助けによって、過去の生きたる文化を再現するのである。若し彼が現在多少ともよく似た状態の下に棲息する人間の文化に就て若干の知識を持つならば、彼はその仕事により一層適したる資格を有するものとなることが出来よう、「吾人は既知を通じてのみ未知を知ることが出来るのであり、過去を知るためには現在を研究する外はない。それ故に民俗学を離れて単独に行われる考古学的調査は殆んど無味乾燥に等しい」（セイス著 坪井良平訳 未開民族の文化 十三—十四頁）と。このように、セイス氏は民俗学・民族学と考古学との関係を述べ、そこには「現在を以て過去を説明する」という法則が成り立つと結んでいます。

ところで、この現在と過去とが時間的、距離的に近ければ近い程この法則は有効に働くでしょう。また両者の間に民族的なつながりでもあればさらに効果的であると考えられます。ところがこのような好都合な関係はめったにあるものではなく、多くの場合現在と過去との関係はあいまいです。例えば旧石器時代の資料を現在の知識でもって説明するとしても、その両者に直接的な脈絡をみいだすことは望まません。即ち「現在を以て過去を説明する」という法則は考古学において重要な役割を果しますが、それを十分に生かすにはさらに科学的な操作を必要とします。

### 考古学資料間の相関について

親の身長が大きければ子の身長も大きくなる。これは多くの親子を調べれば確かであることがわかります。以上の事実を親と子の身長は相関するといひ、親の身長と子の身長とは相関関係にあるといひます。実はわれわれの身の回りで観察される現象とか事象の多くは相関関係にあります。これは考古学のフィールドでも同様で、考古学者の研究の大半は相関を求めることから出発します。

さて遺跡で釣針が発見されたとします。同じ遺跡で魚の骨がみつければ、考古学者として当然釣針と魚の骨との相関を調べるでしょう。またその釣針が特定の魚を釣るのに用いられていたかも知れず、釣針と特別に高い相関を示す魚の骨がないものかと調べるでしょう。さらに竿とか乳石、石錘にあたる遺物があるかないか、どのような頻度で発見されるかも釣針との相関を求めるために必要です。

ところで、ある骨角製品を釣針と命名し、それに基づいて起こるさまざまな想像は、「現在を以て過去を説明する」という法則から容易に導かれる研究の見通しです。これは考古学研究の常套手段であり、次のように言い換えることができます。

考古学ではしばしば遺物の分布が調べられます。そしてある遺物と別の遺物の分布が空間的ばかりでなく時間的にも一致するような場合、この二つの遺物の間になんらかの因果関係があったと想定することがあります。ところがこの説明は必ずしもすべての

場合に通用しません。例えば釣針を出す遺跡でしばしば石錘も発見されるとすれば、石錘が釣針と対になって利用された可能性を調べる一つの手掛りとなりますが、それだけでこの2つの遺物関係を決定づけることはできません。即ち、現在を以て過去を説明する」という法則は、釣針と石錘との関係を想像することを許しますが、一方では両者の関係を推論するに際し細心の注意が必要であるということも警告します。いうまでもなく、遺跡とそこで発見される各種の遺物の間には相互になんらかの脈絡があったことは間違いなく、その脈絡を見出すことが重要であります。ただ前に述べたような遺物間の分布とか相関という事実からだけでは確かな関係を捉えることは望めません。このような問題を解くために近年興味ある研究が発表されました。

イギリス、ケンブリッジ大学の教授であったマクバーニ(C. B. M. McBurney)氏は、偏相関 (partial correlation) という統計的手法を使って、考古学資料間の因果関係の程度や性質を論じるという試みを発表しました。(McBurney, 1978)

すでに述べたように釣針と石錘とが一緒に見つかる例が多いという相関関係から、この二種類の遺物の間に因果関係があるかどうかを判定することはできません。ところがもう一つ、例えば時間という変数を追加し、三つの変数間の偏相関係数を求めます。この方法で得られる数値は、例えば釣針と石錘とが因果関係をもつかどうか、釣針と時間とが因果関係をもつかどうかという判断を下す手掛りになるという訳です。次にマクバーニ氏の研究法を解説します。

考古学の世界における相関について

### マクバーニ氏の研究

カスピ海の南海岸近く、アリ・タペ (Ali Tappeh) という小さな洞窟があります。一九六二年、マクバーニ氏によって発見された同年簡単な発掘がおこなわれ (McBurney, 1964) 次いで一九六四年に本格的に調査されました。(McBurney, 1968)

洞窟は五m近い堆積物で埋っていましたが、マクバーニ氏によって二十三枚の層位に区別されました。それぞれの層から発見される炭化物片などを試料として絶対年代を測定してみると、堆積物は洪積世の終わり頃のもので、12,455 B. P. 年から約1,800年にわたることがわかりました。それぞれの層からは、九種類の石器、骨角器それに多種多様な哺乳類や貝類の化石がみつかっています。第1表は、石器、骨角器と哺乳類の百分率を示したものです。この表から、遺物が層位別にどのような割合で見つかり、時代的にどのように移り変わるかがわかります。しかし標本相互の相関関係を読みとることはできません。

そこで次には、九つのタイプの石器・骨角器、九種に分類された哺乳類、それに各層の年代値を含めた十九の変数間について一対ずつの相関を求めてみます(第2表)。全部で一五三通りの組み合わせが考えられますが、得られた数値は変数間の相関の程度を示します。いくつかの組み合わせについて若干の説明を試みてみます。

年代値は backed blade や micro-triangle と有意な正の相関を示し、end-scrapers と trimmed blade とは有意な負の相

第 1 表 アリ・タベ遺跡の道具と哺乳類化石の層位別出現頻度(百分率)および各層の絶対年代値(McBurney, 1968, Table 1を改変)。

層位	絶 対 年 代 (B. P.)	石 器 ・ 骨 角 器									哺 乳 類									
		Bone needles	Bone points	Backed blades	Micro-triangles	Geometrics	Small double points	End scrapers	Trimmed blades	総計	ア ザ ラ シ	ガ ゼ ラ	ヒ ツ ジ ・ ヤ ギ 類	ウ マ	イ ノ シ シ	ウ シ 類	シ カ	イ ヌ の 仲 間	そ の 他 の 小 動 物	総計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9		10	11	12	13	14	15	16	17	18	
23	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3.1	36.5	12.7	9.5	1.6	4.7	4.7	27.0	1.6	63
22	10,828	1.6	—	—	(1.5)	(1.5)	—	29.8	68.8	64	—	6.7	10.0	16.7	16.7	6.7	16.7	25.7	3.6	32
21	10,886	0.82	—	—	(0.82)	(2.5)	—	36.0	63.0	122	1.1	27.3	12.1	11.0	7.1	6.1	13.1	21.3	1.9	101
20	10,953	—	—	—	(0.8)	(2.4)	—	31.0	69.0	126	2.1	27.5	14.8	8.4	6.3	6.3	5.3	28.5	1.0	97
19	11,003	—	0.73	—	—	(1.5)	—	25.3	74.0	137	2.2	19.2	18.0	7.9	3.4	10.1	6.8	32.5	—	91
18	11,065	—	0.62	—	—	(0.6)	—	24.7	74.8	166	2.4	17.6	28.0	6.4	3.2	7.2	5.6	20.6	1.5	125
17	11,130	—	0.74	—	0.74	—	—	28.9	69.5	135	4.0	6.6	37.0	1.3	2.6	6.6	6.6	35.5	—	76
16	11,229	(0.25)	—	0.26	0.51	—	(0.5)	22.2	77.0	388	5.9	11.8	20.4	4.3	2.7	4.8	6.4	44.0	0.5	187
15	11,311	—	—	0.6	0.6	—	—	27.6	71.0	167	8.8	7.0	31.5	3.5	5.3	1.8	7.0	35.0	—	57
14	11,409	—	—	0.27	0.27	—	0.27	27.0	71.7	372	19.4	5.0	19.4	1.4	3.7	2.1	3.7	45.0	2.7	139
13	11,535	—	0.40	0.4	0.79	0.4	0.4	28.2	69.5	252	28.0	12.2	17.6	—	0.9	1.7	1.7	37.0	3.3	115
12	11,693	0.72	0.47	0.47	0.47	0.47	0.47	27.0	70.0	426	15.2	26.3	20.3	—	2.5	1.3	0.9	33.0	12.0	243
11	11,850	2.2	—	5.5	—	1.1	(0.22)	29.6	61.5	91	—	43.5	10.0	—	6.7	3.3	3.3	33.0	27.0	0
10	11,904	2.2	—	11.2	—	2.2	—	22.2	62.3	45	—	64.0	14.0	—	7.0	7.0	—	7.0	42.0	15
9	11,934	3.5	—	8.8	1.8	3.5	—	24.6	58.0	57	—	44.0	8.0	8.0	12.0	4.0	—	24.0	30.0	26
8	11,981	1.4	—	9.3	0.72	1.4	0.72	20.2	66.1	139	1.8	38.5	25.5	2.4	3.6	1.2	2.4	25.5	13.0	86
7	12,016	0.78	—	10.1	0.78	1.6	0.78	20.3	65.5	128	1.4	36.0	28.0	—	2.8	—	2.8	29.0	6.2	75
6	12,080	1.7	—	8.7	2.0	1.1	2.2	17.8	66.5	355	2.4	37.5	19.5	0.8	3.3	0.8	2.4	33.4	6.1	123
5	12,170	1.6	—	12.0	3.3	1.6	2.7	19.9	59.0	362	2.2	38.0	22.5	3.7	5.6	0.7	4.5	22.5	1.1	89
4	12,251	1.5	0.38	16.5	4.6	1.1	1.5	16.1	58.5	261	1.9	44.5	20.4	7.4	5.6	1.9	7.4	11.1	18.2	54
3	12,322	1.4	0.37	14.2	4.6	1.4	0.87	17.8	59.0	219	—	60.0	22.2	—	—	4.4	6.7	6.7	21.2	45
2	12,389	1.4	1.4	12.0	2.8	2.1	1.4	11.3	67.5	141	—	62.5	16.6	—	—	8.3	4.4	8.3	33.5	24
1	12,455	2.5	1.3	15.2	1.3	1.3	2.5	12.5	63.0	79	—	61.0	22.3	—	—	11.0	—	5.5	—	18

第2表 第1表の数値から算出された、絶対年代値、道具および哺乳類化石の各対の相関係数。ボールド体は有意な正の相関 (p=0.01), イタリック体は有意な正の相関 (p=0.05), \*は有意な負の相関 (p=0.05). (McBurney, 1968, Table 2を改変)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
1		—	—	<b>0.93</b>	<b>0.69</b>	—	0.69	-0.83*	-0.65*	—	<b>0.81</b>	—	—	—	—	-0.53	-0.59*	<i>0.59</i>
2	0.25		—	—	—	<i>0.69</i>	<i>0.78</i>	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	<i>0.56</i>
3	0.149	0.58		—	—	0.83	—	-0.71	—	—	<b>0.67</b>	—	—	—	<i>0.75</i>	—	—	—
4	0.93	0.17	0.49		<b>0.77</b>	—	<i>0.65</i>	-0.80*	-0.79*	-0.73	<b>0.86</b>	—	—	—	—	—	-0.88*	—
5	0.69	0.05	0.06	0.77		—	—	-0.60	-0.76	—	<b>0.67</b>	—	—	—	—	—	-0.74	—
6	0.27	0.69	0.83	0.38	0.16		—	—	—	-0.87	—	—	—	<b>0.87</b>	—	—	—	<i>0.59</i>
7	0.69	0.78	0.65	0.65	0.42	0.39		-0.67	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
8	-0.83	-0.13	-0.71	-0.80	-0.60	-0.19	-0.67		—	—	-0.67	—	—	—	—	—	—	<b>0.56</b>
9	-0.65	-0.50	-0.15	-0.79	-0.76	-0.82	-0.59	0.28		—	-0.71	—	—	—	—	—	—	<b>0.67</b>
10	-0.04	-0.44	-0.56	-0.73	-0.43	-0.87	-0.63	0.27	0.29		-0.53	—	—	-0.53	—	—	—	<i>0.55</i>
11	0.81	0.37	0.67	0.86	0.67	0.51	0.54	-0.67	-0.71	-0.53		—	—	—	—	—	—	-0.85
12	0.02	-0.50	-0.09	-0.03	-0.24	-0.44	0.01	-0.20	0.31	-0.15	-0.27		-0.67	-0.61	—	—	—	—
13	-0.47	-0.40	-0.46	0.43	0.54	0.59	0.17	0.46	-0.13	-0.45	-0.03	-0.67		<b>0.80</b>	<i>0.53</i>	<b>0.88</b>	—	—
14	-0.16	0.50	-0.06	0.42	0.40	0.87	0.65	0.25	-0.40	-0.53	0.13	-0.61	0.80		—	<i>0.80</i>	—	—
15	-0.21	0.25	0.75	0.41	0.01	0.35	0.30	-0.09	0.18	-0.37	0.18	-0.09	0.53	0.24		<i>0.48</i>	—	—
16	-0.53	0.00	0.19	0.32	0.44	0.45	0.31	0.36	0.04	-0.45	-0.25	-0.29	0.88	0.80	0.48		—	—
17	-0.59	-0.19	-0.63	-0.88	-0.74	-0.37	-0.48	0.56	0.67	0.55	-0.85	0.18	-0.47	-0.41	-0.37	-0.24		-0.64
18	0.59	0.56	0.78	0.46	0.45	0.59	-0.02	-0.39	-0.52	-0.09	0.82	-0.37	0.02	0.27	0.26	-0.19	-0.64	

関を示しています。以上の結果は、前の二つの石器は年代値が若くなるとともに出現頻度も同じ傾向で低くなることを意味し、後二者の石器の場合はそれとは逆の現象を示すことを意味しています。以上の関係は第1表の層位別の遺物出現頻度値をみれば容易に理解できます。また、ガゼラが年代値、bone point, backed blade, micro-triangleと有意な正の相関を示します。これはガゼラの層位別出現頻度が時代とともに減少し、その減少が他の三つの道具類の出現頻度とよく似た傾向を示すことを意味しています。このように資料相互の相関係数を算出してみると、第1表のような頻度表では十分に判断できない事実をよりの確に捉えることが可能です。しかしこの段階ではまだ資料相互にどのような因果関係が存在するかを論じることは無理です。例えばガゼラがbone point, backed blade, micro-triangle という道具類と高い相関を示すという結果に基づいて、この道具類がガゼラを狩猟解体、調理する目的をもって特別に発達したとは結論できません。その点を調べるために偏相関係数の算出という統計学的手法が用いられます。

第2表の数値は年代値、道具、哺乳類という三つの変数の各対について直接求められた単相関係数です。この数値から各変数の各対に関する偏相関係数を算出することができます。例えば、第2表で相互に有意な正の相関を示した年代値とbacked bladeとガゼラという三つの変数を用いてbacked bladeとガゼラの偏相関係数を求めたとします。この意味は、時間を一定にしたと仮定した時にこの二つの資料の間にどのような関係が成立するかを統

第3表 第2表の数値から算出された、道具と哺乳類化石の偏相関係数、ポールドは有意な相関 (p=0.05) (McBurney, 1973, Table 1を 改変)

道 具	哺乳類		Bone points	Backed blades	Truncated blades	Micro-triangles	Lunates	Notches	Bone needles	End scrapers
	ガゼラ	イノシシ動物マカシ								
ガゼラ			.12	.58	.55	—	—	—	.41	.08
イノシシ			—	.30	.57	.19	—	—	.79	.24
小動物			—	.13	.44	—	—	—	.46	.28
ウマ			—	.67	.56	.60	.21	—	.59	—
シカ類			.18	.43	.15	.72	.23	—	.12	—
ウシ			.73	.34	.31	—	.02	.06	.25	—
ヒツジ・ヤギ			.25	—	—	—	.14	.46	—	—
イヌの仲間			—	—	—	—	.04	.44	—	.18
アザラシ			—	—	—	—	—	.39	—	.23

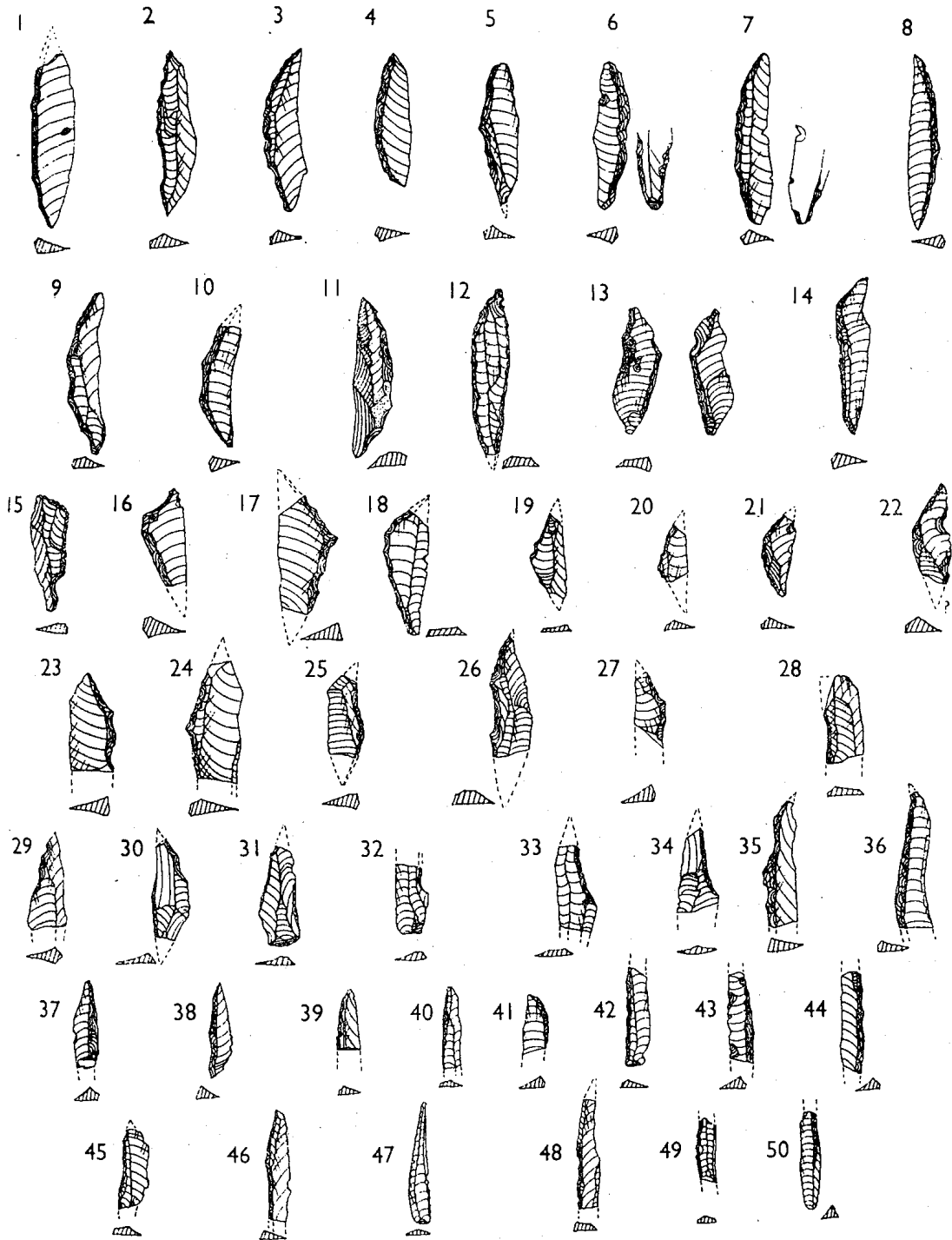


Fig. 7

第1図 アリ・タペ遺跡の細石器 (McBurney, 1968, Fig. 7)



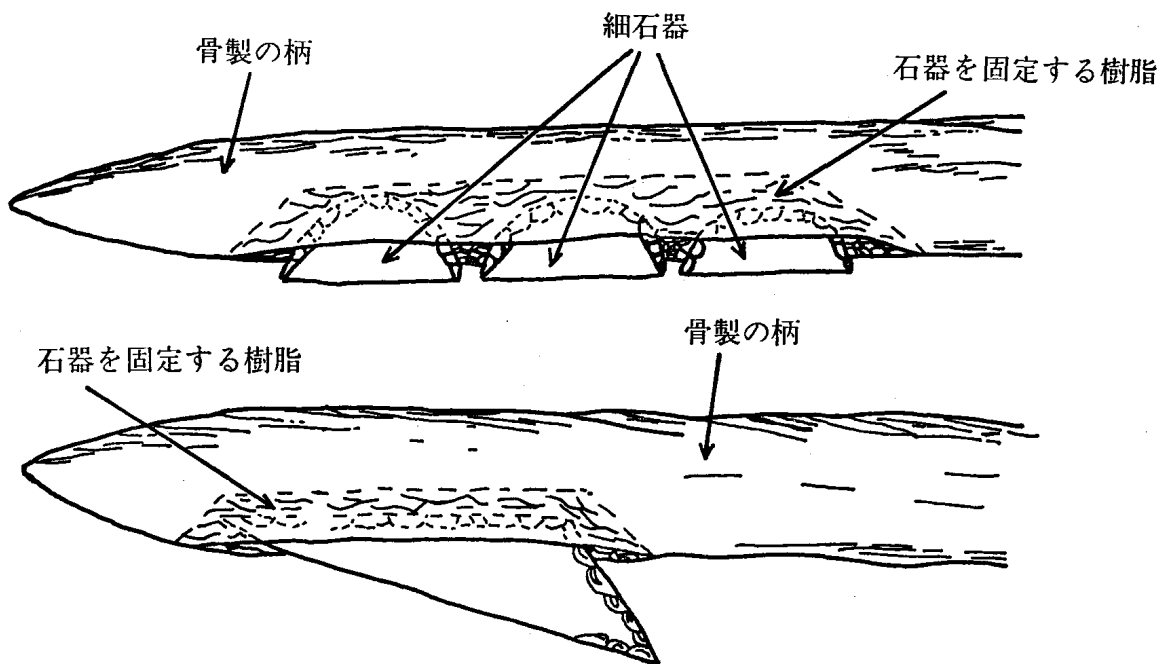
計学的に調べてみるようになります。その結果は backed blade とガゼラの出現頻度が因果関係をもっているかどうかを検討することを可能にします。即ち単相関係数は対比する変数の出現頻度が独立にどのような傾向を示すかを考えることを可能にし、偏相関係数は出現頻度の傾向が因果関係をもつかどうかを検討することを可能にする訳です。

さて第3表は第2表の単相関係数を使って、年代値を消去した場合の道具と哺乳類との偏相関係数のマトリックスです。この結果を検討してみますと次のようになります。

ガゼラと有意な相関を示す道具として backed blade, truncated blade がみつかります。これと同じような相関を示すのが ウムと backed blade, truncated blade, micro-triangle, bone needle、シカと micro-triangle、ウシ類と bone point、ヒツジ・ヤギ類、イヌの仲間と notch です。それ以外に有意な組み合わせはみいだせません。そして、有意な相関を示す組み合わせは、年代、即ち層に関係なく一方が増加すればもう一方も増加し、一方が減少すればもう一方も減少するということを示します。しかも組み合わせを示す遺物は因果関係をもって増加あるいは減少しているのだと結論づけられます。最後に偏相関の分析結果を若干考察してみます。

### 分析結果の考察

この遺跡で発見された道具は石器と骨角器に大別されますが、その中で細石器と総称されるものが重要な道具と考えられます



第2図 細石器の使用法の例 (Burkitt, 1926, Plates 3, 4 を改変)

(第1図)。マクバーニ氏は細石器をその形態によって細かく分類していますが、その結果をもって実際の石器使用法の分類とみなす必要はありません。そして第3表の結果から backed blade、truncated blade、micro-triangle などと細分されている細石器は、ガゼラ、イノシシ、ウマ、シカなどの陸上の獣の狩猟活動と結びついていた可能性はあるが、小動物、ヒツジ・ヤギ類、イヌの仲間およびアザラシなどの狩猟活動とは因果関係をもっていかなかったということになります。

細石器の使用法については昔からいろいろと議論されています。その中で最もよくいわれるのが、骨や木の軸に埋めこんで利用したということです(第2図)。アリ・タペ遺跡でこの種の軸にあたる遺物がみつかつている訳ではありませんが、やはり最も可能性の高い使用法と想像されます。それが投槍器であったか、ヤスであったか、あるいは獣を解体するナイフ状の道具として利用されたかはわかりません。ただ同種の道具が他の獣や小動物とは結びつかないわけで、それらの狩猟活動には別の道具が開発されていたのかもしれない。

次に end-scrapers について考えてみます。これは、長さ三〜四cm、幅が二・五〜三cmの比較的幅広の剥片を使い、その一端が細かく加工されたずんぐりした石器です。その全体の形態から推して、武器というよりむしろ骨、木をけずったり、刻み目をつけるための加工具と考えられます。アリ・タペ遺跡ではこの石器が各層で比較的多量にみつき、あきらかに洞窟の住人にとって重要な道具として利用されつづけた訳です(第1表)。しかし第3表

考古学の世界における相関について

ではいずれの動物種とも有意な相関を示しておらず、特定の動物の狩猟活動と結びついて発達したとはいえません。

このようにしてアリ・タペ遺跡で発見される道具類を、一緒にみつかる動物化石と関連づけて分析することができます。ただこの種の研究で注意するのは、問題となる遺物相互に因果関係があるかないかを経験的に推定できるか、あるいはそのような仮定を設ける必要があります。そうすることにより、どの変数を消去すればよいか、偏相関係数が作用する要因の重要度を評価することが可能になります。この際に「現在を以て過去を説明する」という法則の重要性が生きてまいります。そして最後にえられた数値を解釈する方法もまたこの法則にたかえらなければなりません。

遺跡・遺物の研究とは、実はその大半が相関を求める作業で成り立っています。ある遺物と別の遺物、ある文様と別の文様との間で相関の度合を測り、その結果の意味を探ることです。そして貧弱な物質的掛りの中から相関をもつ現象、事象を探るために各種の分析法が考案されています。偏相関を用いた分析法もその一つですし、これからも新しい分析法が考案されることでしよう。ところがいかに立派な科学的操作をと目論んでみても、「現在を以て過去を説明する」という法則に注意深い配慮が払われていないかぎり成功は期待できないようです。

おわりに

日本考古学の特色は数多いが、最近の動向といえは次の二点に

しぼられるでしょう。一つは遺跡調査数の著しい増加とそれにもなう数々の新知見の報告であり、もう一つは、各種の自然科学的手法の導入に基づいた多角的研究が増え、数々の新所見が発表されることでしょう。

小田静夫氏(一九七八)によれば、昭和五十二年におこなわれた埋蔵文化財調査数は優に五千件を越え、例えば昭和四十五年度と比べ、約五倍に達します。この現象は、昭和四十年頃から日本経済がわいゆる高度経済成長期に入ったことと相関しています。すなわち土地開発にもなって発見される遺跡を工事に先だって調査する緊急調査方式が日本各地で定着したからです。

緊急調査の急増に対し、いわゆる学術調査の実施件数は毎年二百件に満たない状態です(小田、一九七八・一八七頁)。緊急調査と学術調査には、前者はやむを得ず実施されるという性質が強く、後者は研究者の積極的興味に基づいて実施される性質が強いという違いがあります。多くの研究者は、おそらく後者の学術調査により魅力を感じているでしょうが、現実には、風前のともしびといった遺跡を救うことに追われてしまいます。

ところで、緊急調査は受動的に実施されるものですが、その実績は測り知れぬ程大きくなっています。いまでは、緊急調査の成果をぬきにしては日本考古学を語れないといえるでしょう。例えば、集落遺跡とそれにもなう数々の遺物や遺構が従来の知見を次々と書き変えていく背景には、多くの場合緊急調査方式で実施される大規模発掘があります。ところが、新しい知見は大規模発掘によって加わるばかりではありません。調査法、研究法の変化

にもなう斬新な成果も無視できません。

緊急調査の報告書が毎年数百冊出版されています。その多くに各種の自然科学的分析結果がもり込まれています。このような傾向に対して、研究が面倒になり、余計な費用が必要だと嘆く研究者もいます。また、それだけの効果があがっているのかと多角的研究方式を疑問視する研究者もいます。

ところが近年になって、領域ごとで単独におこなわれる研究は極めて一面的であり、遺跡、遺物の研究を多くの分野の研究者が連携して計画、実施する必要性が説かれています。今日では、考古学のフィールドに地形学、古生物学、動物学、植物学、人類学などの専門家が参加することが全く不自然ではありません。むしろ、そのような協力態勢がとられなければ近視眼的な研究しか進められない危険がともなうとさえ言えます。

このような装いを新たにした考古学研究は海外において数多く軌道にのり成功した例もいくつか認められます。そしてわが国においても各所に芽生えているといえます。それが実は緊急調査方式に負う面が大きいといえます。

ところで、すでに述べたように緊急調査は受動的側面が強い。従って調査の過程で立案される計画が自然と受動的となり、さまざまな分析法が研究上積極的意味をもたぬまま導入されることもありまます。すなわち、学問体系あるいは研究体系が必然性をもって生れるというよりは、各専門領域の表面的形態の模倣によって構成される危険が生じます。しかし、われわれの世界は関係の世界であり、その関係、つまり相関の度合いや性質を求めることを

積極的に評価することをはたさなければ、以上の危険も緩和される  
かも知れません。

#### 引用文献

- Burkitt, M. C. 1926: *Our Early Ancestors*. Cambridge
- McBurney C. B. M. 1964: Preliminary report on  
stone age reconnaissance in north-eastern  
Iran. *Proceedings of the Prehistoric Society*, Vol. 19,  
pp. 382-399
- McBurney C. B. M. 1968: The cave of Ali Tappeh and  
the Epi-Palaeolithic in N. E. Iran.  
*Proceedings of the Prehistoric Society*, Vol. 23, pp.  
385-413
- McBurney, C. B. M. 1973: Measurable long term varia-  
tions in some old stone age sequences.  
In: Colin Renfrew (ed.) *The Explanation of Culture  
Change*, pp. 305-315. Duckworth, London.
- 小田静夫 一九七九：緊急発掘の現状 自然科学と博物館  
Vol. 46, No. 4 pp. 187-189
- Sayce, R. U. 1933: *Primitive Art and Craft—An Intro-  
duction to the Study of Material Culture*, New York.  
(坪井良平訳 一九四二 未開民族の文化—物質文化哲学  
論、葦牙書房、東京)